拓殖大学百科

(国際学部編)

社会・地域に貢献する研究







校

力あふるゝ海の外に差別なりある。るゝ海の外になった。

拓かでやまじ我が行手ないで星を見るところないで星を見るところいてとも はいで星を見るところいてとも はいでとも はいいで星を見るところいいので という はいか できる は れの色に飛ぶ

姿が鳴る人と闇な扶む右め ぞい呼らはは桑う手で 我な輝深醒を消ぎの に のけやめえ岸き文が よに化か ょ 神が雄なと 曲 渾、呼は呼ばあ 炬ののぶぶげを 永 ははてか 井 誰た誰た 建 / げ ぞぞ 子

歌

作

詞

宮

原

民

平

<掲載	内容>
-----	-----

W = L5 Lm

1.	子長疾拶	• •	• •	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		2
2.	国際学部	長挨拶	·	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		3
3.	国際開発	开究所	iと地	域	連	携	セ	ン	夕	_		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		4
4.	国際学部	教員紹	介:	ゼ	3	ナ	_	ル	教	育		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		5
5.	写真で見る	る実践	学習	の	現	場		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	2	5
6.	拓殖大学均	也域連	携セ	ン	夕	_	会	議	委	員		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	3	8
7.	編集後記	(副学	長)		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	3	9

八王子国際キャンパスは、昭和 52 年(1977 年)の開設から今日まで 地域社会の皆様にご支援を頂ながら 40 有余年の月日が経過致しました。

本学は、これを契機として、これまでの歩みを基に、昨年(平成30年) 4月に社会連携・貢献の一層の強化を図るとの観点から「地域連携センターを設置致しました。

この小冊子は「社会に開かれた国際大学」を掲げる本学を応援して下 さる地域社会の皆様に本学の教育内容をご理解頂く一助として作成した ものです。多くの皆様にお手に取って頂き、お読み頂ければ幸いです。

尚、ここに掲載した内容に関するお問い合わせやご不明な点等がござ いましたら、下記までご連絡下さい。

■拓殖大学地域連携センター(八王子事務部)

2 (042) 665-1443

表紙写真:甲斐信好教授「ルワンダ共和国の外務省にて。建物はすべて 中国の援助で建てられている」 グローバル人材と本学の国際学部教育、そして地域貢献 –学長 川 名 明 夫(地域連携センター長)

拓殖大学は、アジアに、そして世界に貢献する真のグローバル人材の育成を 建学の精神として、1900年(明治33年)に創立された歴史と伝統のある 国際大学です。そして、海外からの留学生の数は約1000名に達します。

本学の八王子キャンパス(現八王子国際キャンパス)は、1977年に商学部、政経学部の1、2年生と外国語学部からなる3学部体制で発足しました。 その後の変遷を経て現在では、外国語学部、国際学部、工学部の3学部からなる、学生数が約4000名の自然に恵まれた郊外型キャンパスとなっています。

八王子キャンパスにある、外国語学部、国際学部は、文字通り国際性の高い学部で、多数の留学生も在籍し、キャンパスにいながら国際交流ができる環境にあります。国際学部は、学外の機関とも連携しながら、国際的な視野に立った地方、地域の活性化・創生を目指した教育、研究を進めています。

八王子キャンパスの設置以来40有余年が経過しました。これまで、紅陵祭、スポーツフェスティバル、国際フェスティバル、語劇祭等を通して近隣の皆様とも交流を図らせて頂いてきた所です。しかし、各学部の先生方の教育、研究活動に関しては必ずしもご理解いただけていないのではないかと考えています。

特に、急速な人口減少による地方の過疎化が進む今日、国際的な視野に立った地方、地域の活性化を目指す国際学部の教育、研究の内容を多くの皆様、特に地域の皆様に知って頂くことは皆様のお役にも立つのではないかと考えこの小冊子を作成致しました。

拓殖大学は、国際的視野で地域社会の課題解決にも貢献できる「社会に開かれた国際大学」を目指し、地域社会と共生し、地域社会から信頼される存在となるべく、これからも人材の育成に邁進して参ります。 (工学博士)

- 社会に開かれた学部を目指して -

国際学部長 甲斐 信好

拓殖大学国際学部は、「海外に活動する有為の人材を育成する」という拓殖大学建学の理念に基づいて、大学創設百周年に当たる西暦 2000 年に八王子市館町に 産声をあげました。

世界には様々な国があり、考え方の違う多くの人たちが住んでいます。私たちが「常識」としていることが常識でないこともしばしばです。そのようなグローバル化する世界でどう共存して生き延びていくのか。

学生は2年次から国際協力、政治経済や観光などのコースを選択します。世界に通用するアスリートをめざしている学生もいます。30を超す専門ゼミナールから自らの関心にあったものに所属して教員の親身な指導を受けます。多様な世界にアプローチして、フットワークの良い国際人となることをめざしています。本学の建学の精神「積極進取の気概と、あらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を具えた、有為の人材を育成すること」を具現化しようと精進を重ねています。活動の場は日本国内を含む世界中です。学生が主体となってラオスと日本の三陸の生産者を結んだり、地元八王子との連携や、国際性と「地方創生」を結んだフィールド学習もあります。英語はもちろん地域言語(タイ語、インドネシア語、アラビア語、ヒンディー語、中国語や韓国語など11か国語)や海外での活動も重視しています。

私はグローバルな時代に一番大切なのは「自分を知り、自分を信じる」ことだと思っています。素直な心で世界を知り、自分を知る。そのような学生を育ててていきたい。国際学部は、学長のメッセージにもありますように、国際的視野で地域社会の課題解決にも貢献できる「社会に開かれた学部」を目指しています。もし機会があれば、地域の皆様にも積極的にお役に立ちたいと願っております。どうぞ宜しくお願いいたしします。 (学術博士)

国際開発研究所と地域連携センター

●国際開発研究所

(所長:徳原 悟国際学部教授)

国際開発研究所は、国際的視野の下に、開発協力と開発途上国・地域の多様な歴史、文化、言語、政治、社会、経済及びこれに関連する諸分野を調査研究し、学術の進展と地域の発展に寄与することを目的としています。これを達成するため、次の事業を行っています。

- (1) 開発協力及び開発途上地域の諸問題に関する調査研究
- (2) 開発協力及び開発途上地域の諸問題に関する刊行物の発行
- (3) 開発協力及び開発途上地域等の諸問題に関する研究会、講演会、シンポジウム等の開催
- (4) その他、研究所の目的を達成するために必要な事業

●地域連携センター

(センター長:川名明夫学長)

本学の教育・研究成果の知を基盤として国内外の地域社会との交流及び活性化 に貢献すること、また、学外諸機関とも連携して学生の実践的学修に資するとを 目的として、平成30年4月1日に八王子国際キャンパスに設置致しまた。

尚、同センターの主な事業は、下記の通りです。

- 1. 地域社会及び学外諸機関との連携・交流・協働に係る活動の推進に関する事項
- 2. 地域社会及び学外諸機関との連携に係る協定作業に関する事項
- 3. 地域社会の課題等についての調査・研究に関する事項
- 4. センターの情報発信に関する事項
- 5. その他センターの目的を達成するために有益な事項

国際学部教員紹介:ゼミナール教育

○国際学部 国際学科

藍澤	淑雄准教授	『地域コ	ミュニテ	ィと支持	爰をつ	なぐ	•	• •	•	•	• •	•	•		8
新井	典子教授	「英米文化	・社会に	親しむ」					•	•		•	•		8
新田目]夏実教授	「国際協力	の形を学	ぼう!」					•	•		•	•		9
石川	一喜准教授	と 「持続可	能性の追	究」・					•	•		•	•		9
稲田	雅也教授	「ニッポン	の社会・	文化と	現光」				•	•		•	•		9
呉	善花教授	「朝鮮半島、	日本の	文化・月	歷史」				•	•		•	•	1	0
王	曙光教授	世界と向	き合う日	本の産業	業と経	済」			•	•		•	•	1	0
岡田	実教授	「中国とつ	ながり、	アジア。	とつな	がり、	世	界と	:つ	なれ	がる	6]	•	1	1
小高	泰特任教	対 「ベト	ナム地域	研究(ベトナ	'ム人!	民軍	隊史	1,	べ	トナ	-7			
		現代史、	中越関係	、労働	力輸出	政策	等)	.	•	•		•	•	1	1
甲斐	信好教授	「タイ、ア	フリカ、	世界と日	自分」				•	•		•	•	1	1
梶原	弘和教授	「物事の考」	え方の基	本を学ん	%] •				•	•		•	•	1	2
近藤	真宣教授	「ことば、	人、そし	て文化」					•	•		•	•	1	2
佐藤	明彦教授	「英語を通	じて世界	にふれ。	よう 」				•	•		•	•	1	3
佐藤作	申一郎教授	「競技スポ [、]	ーツと論	理的思	考とセ	カン	ドキ	ャリ	ア	J		•	•	1	3
佐藤	丙午教授	「論理的思	考と政治	研究」					•	•		•	•	1	3
佐原	隆幸教授	「途上国の	課題解決	の切りね	礼を探	せ」			•	•		•	•	1	4
椎野	幸平准教授	を「アジア)	経済・貿	易論」					•	•		•	•	1	4
下條	正男教授	東アジア	の歴史と	文化を	考えま	す}			•	•		•	•	1	5
竹下雪	室治郎准教授	と 「身近な	ラテンア	メリカ」					•	•		•	•	1	5
竹下	正哲教授〔	『「知って	いる」で	はなく、	「で	きる。	を	求め	て]		•	•	1	6
田海	晋一准教授	と「アジア	の空港計	画の理解	解」・				•	•		•	•	1	6
杜	進教授	「中国と世	界」・・						•	•		•	•	1	6
可川	点教授	「日本の歴	中と文化	、教育は	こつい	て考	える	•						1	7

徳永	達己教授	「地方創	生の経	験を	通じ	て国	際	開多	発に	つ	11,	てま	きえ	こる		•	•	•	1	7
徳原	悟教授	「世界経	済の動	きを	知る		•	•		•	•	•		•	•	•	•	•	1	8
内藤	嘉昭教授	「観光で	思考す	る私	自身	と社	L会			•	•	•		•	•	•	•	•	1	8
西口	茂樹教授	「コーチ	学(運	動方	法)	.	•			•	•	•		•	•	•	•	•	1	8
野村	進教授	「どう生	きてい	くか	?」		•	•		•	•	•		•	•	•	•	•	1	9
原嶋	洋平教授	「地球環	境問題	Íへの	社会	の耳	なり	組み	み」	•	•	•		•	•	•	•	•	1	9
福田	惠子教授	「異文化	交流を	通し	て日	本と	:向	きに	合う	j	•	•		•	•	•	•	•	2	0
水野	晶子教授	「日本人	ならて	ばの	英語	学習	法	をき	ŧŁ	め	あ	げる	5]	•	•	•	•	•	2	0
M. ₹	ルティアド	ス特任語	構師 「	英語」	•			•	•		•	•	• •	•	•	•	•	•	2	0
文	大宇教授																			
茂木	創教授	「世界を	知る。	自分	を知	る。	J	•		•	•	•		•	•	•	•	•	2	1
矢口	優教授	「経済学	を使っ	て農	村開	発·	玉	際	盘大	j •	地	方倉	削生	きを	学	び	,			
		体験し	てみよ	う」			•	•		•	•	•		•	•	•	•	•	2	2
横山真	真規雄教授	「世界を	見る、	日本	を見	る、	そ	しっ	て人	、間	を	見る	5]	•	•	•	•	•	2	2
吉野	文雄教授	「経済学	をきれ	める	.		•	•		•	•	•		•	•	•	•	•	2	3
リチャ	ノード・ヘー	セルトン	准教授	「革	語」														2	3

■藍澤 淑雄准教授「地域コミュニティと支援をつなぐ」 博士(国際協力学)

途上国や日本の地域コミュニティが抱える切実な問題を理解し、その解決に向けて何が課題となっていて、どのような協力や支援ができるのかについて考えていきます。地域の現実を知らずにいくら新しい活動を提案し実行しても上手くはいきません。まずは現場に足を運んで、自分の「眼」で見て、そこで暮らす人々から教えてもらうことが重要です。現場の人々とかかわりをもてば、表面的に見えてこない人々と社会の関係に気が付くはずです。地域コミュニティでの社会調査などの活動を通じて現場感を養いながら、具体的な支援や協力のあり方を探っていきます。

■新井典子教授「英米文化・社会に親しむ」

Ph. D 博士

とにかく英語に触れ、英語に親しみ、英語による楽しみを共に分かち合うことを目的とします。英米小説やエッセイ、ノンフィクションなど多種多様な英文の読み物を読んだり、映画やドラマ、洋楽を楽しんだりと、日常に英語を取り入れ楽しめる下地作りを行います。もちろん文法や語彙等の基礎的事項も必要に応じて確認していきます。それと同時に、世界の動向を英米メディアを通して把握する訓練も行います。英文ニュースを読み解く力は物事を複眼的に見る力を養い、不、安定な現代社会を生きていくうえで大きな武器となります。'World Englishes (「世界諸英語」)という言葉が叫ばれて久しい現代にあって、身につけるべき英語は、決して背伸びせず「私流」でいいのです。大学時代に、この「私流の英語」をなんとしても身につけ、生きる力にしていきましょう。

■新田目夏美教授「国際協力の形を学ぼう!」 Ph. D.

国際協力のいろいろな形を学びます。理論的には国際社会学をベースに、社会問題とボランティア・NGO活動、ソーシャルビジネス、途上国・フィリピンの開発問題等について学びます。しかし、国内でも外国人が増え、多文化共生にかかわる課題が増加しています。このように、国内でも国際的視野を持って解決を考えなければならないような課題が増加しています。従って、新田目ゼミでは、国外外の問題について、国際的視野を持ちながら社会学的な勉強をします。なお、グローバル化時代なので、英語の学習と海外留学や海外インターンを奨励しています。夏季にはフィリピンでゼミ合宿を行っています。このような学習を通じ、国際社会を理解する一方で、社会に出て役に立つ行動力、チームワーク、理論的思考力、文章力と発表能力および語学力の養成を目指しています。

■石川一喜准教授「持続可能性の追求」

修士(教育学)

現在の"持続不可能"なシステムをどう持続可能なものにしていくか、調査研究していきます。自分の足元と世界のつながりを認識しながら、どんな生き方や社会を選択していかなければいけないのか、自分なりに深めることが第一義です。また、それを独りよがりなものに陥らせないために、どう発信し、共有していったらいいのか、その方法論もあわせて探っていきます。調査研究活動に取り組むための土台作りとして文献研究をするなど「持続可能性(Sustainability)に関する見識を深めていきます。

■稲田雅也教授「ニッポンの社会・文化と観光」

工学修士

社会学と経済学をゼミ生共通の価値観として、日本の社会、文化、観光(地)に

ついて学びます。訪日外国人旅行者数が3,000万人を超え、国内の著名な観光地では、外国人旅行者の姿を頻繁に見かけるようになりました。彼らはどうして旅行先として日本を選んだのでしょうか。日本のどんな点に魅力を感じているのでしょうか。たとえばそんなことについて学んでいきます。日本の社会、文化、観光について、きちんとした言葉で自分の考えを伝え、日本の観光の現状と未来について、客観的わかりやすく説明できる人材になることを目指します。

■呉 善花教授「朝鮮半島、日本の文化・歴史」

国際学修士

真の国際人とは——国際社会である現代、まず自分の国の歴史と文化を知ろう! そして、互いに文化的な差異を尊重し合える異文化の人と人による実際的なコミュニケーションを。○自分の国の文化の特質を知る:日本文化の特質を形づくる生活習慣・美意識・価値観・発想・思考形態・歴史性などに焦点を当て、さまざまな顔をもつ日本文化のあり方を一つ一つ浮き彫りにしていく。○最も近隣関係にある朝鮮半島の文化・社会との共通性・異質性を見る、○世界の民族と宗教の特徴を見ていく中で、日本の民族性と宗教性について考える。

※日本文化を体感するため茶道も実施します。

■王 曙光教授「世界と向き合う日本の産業と経済」

文学修士

日本人学生と外国人留学生との共同運営で活動しています。日本の産業と世界の 産業の最新情報に注目しています。海外・国内合宿などで実際の国際交流を体験 し、行動力を身に付けます。異文化交流を実践しながら、共通の目標を目指す多 国籍ゼミが特徴です。いざ、国境を越えての活動に参加すると、不安と心配が尽 きません。経済と産業の現場を経験していないため現場が怖いものに見えるから です。平常心で世界に向き合うことのできる人材を育てていきたいと思います。 ■岡田 実教授「中国とながり、アジアとつながり、世界とつながる」 政治学博士

学びと活動(交流・協力)を通じて、広い視野と見識を有し、将来日本と中国・ 台湾や発展途上国との架け橋となる人材をそだてることを最終目的とします。そ のための基礎的能力の習得・様々な経験を通じた問題意識の涵養、人的ネットワ ークの強化を目的とします。現代中国・台湾の政治社会・東アジアの国際関係、 国際協力・国際交流を主な学習・研究領域とします。

八王子国際協会等が主催する秋の「八王子国際交流フェスティバル」に2年生が 全員参加し、異文化交流スペース会場ボランティア、中国ブースの出展などの実 践活動も行っています。

■小高 泰特任教授「ベトナム地域研究(ベトナム人民軍隊史、ベトナム現代史、中越関係、労働力輸出政策等)」

国際学修士

ベトナム語の授業を通じて、言語力の向上はもちろんのこと、この国の歴史をは じめ政治、経済、文化、国際関係等の知見を広げて地域的視点から世界を見つめ る視野を養います。言語面では、発音力が重視されるベトナム語の微細な音の変 化を丁寧に指導します。また、現地短期研修を念頭に、歴史をはじめ政治、経済、 文化、国際関係を含めた総合的知識を授業に取り入れています。

■甲斐信好教授「タイ、アフリカ、世界と自分」 学術博士

国際政治の最前線、世界の現実を知ること。その上でグローバルな世界の中、これからの自分の生き方を考え、しっかり生きていく人を育てたい。ゼミの活動ですが、私はタイ・東南アジアとアフリカがフィールドです。世界を知るためには、自分の国以外に最低2カ国を知ることが必要だと思っています。また、政治は人

間がやるものです。政治学を学ぶことは、人間を知ることです。その上で、自分の考えを伝えるにはプレゼンテーション能力を高めることが必要。国や文化が違う人々と生きるために英語のトレーニングも必須です。

タイ、アフリカ、そして世界と自分を知ること。学生ばかりでなく、地域の皆様とも共に学び、成長してまいりたいと思います。私個人のみならず学生たちも学校での模擬授業などを積極的に行ってきました。お役に立てることがあれば、どうぞ何なりとお声がけ下さい。お待ちしています。

■梶原弘和教授「物事の考え方の基本を学ぶ」

学術博士

経済、地域事情などの人文・社会科学系の知識は、情報として記憶するだけではなく、総合的に積み上げていかなければなりません。また一方的な、あるいは偏った視点で知識、情報を集めてはなりません。そのためには人の受け売りではなく、自分の考えで知識、情報を獲得しなければなりません。自分で考える、これが学問の基本的な視点です。文章を読んで、その内容を批評する。批評は言葉ではなく、文章で表現する。他の人の批評と自分の批評と比較し、その相違点を考える。

■近藤真宣教授「ことば、人、そして文化」

文学修士

ことばは文化の重要な一要素であり、ことばを通じて、そのことばを用いている文化、社会人のあり方を見ることができます。日本人にとっては母語、留学生にとっては外国語である日本語を題材に、世界を見る方法を学びます。人が、ある場面、人間関係のなかで意図したことを伝えるために、どのような表現を選択するのか、そして、それが聞き手にどのように受け取られるのかを学びます(語用論の視点)。また、その選択と受け取り方が、話者・聴者の属する文化に左右さ

れることなども考えます(異文化コミュニケーションの視点)。

■佐藤明彦教授「英語を通じて世界にふれよう」

言語教育学・音韻論修士

日本人の英語の音の認識について研究しています。日本語と英語の音を比べると 英語の方が細かく、多くの音素があるため、日本人学習者にとっては英語の聴き 取りや発音が困難となります。この研究を大学英語教育に活かしていきたいと思 っています。ゼミナールの活動としては、イギリス文化を概観し、日本文化と比 較しています。また、学生が実際に英語を使うことを目的とした海外ゼミ合宿を 毎年おこなっています。これまでに、米国、英国、ヨーロッパ、オセアニア、東 南アジアなどで実施してきました。

■佐藤伸一郎教授「競技スポーツと論理的思考とセカンドキャリア」 体育学修士

自分の所属部活動のスポーツについて深く調べます。歴史、ルール、組織運営、体力、戦術コーチングなんでもいいですが自分が興味を持った分野に関しての文献を集め、読み、まとめそれを発表します。できるだけ多くの文献を読み込むことを目的とします。

☆全日本柔道連盟強化委員

■佐藤丙午教授「論理的思考と政治研究」

博士 (法学)

人類及び社会の発展においては、人間の啓蒙と科学主義の推進が貢献したことは 言うまでも有りません。冷戦が終焉し、国際社会のグローバリゼーションの進展 を経た後、今日はグローバルな競争社会が出現しています。その中で、人間社会 の発展の基礎である個々人の見識を、少なくともグローバル競争社会で勝ち残れ るまで高める必要があります。見識を深める上で、過去を知ることが極めて重要です。歴史は事実の羅列ではありません。ストーリーには価値観が伴うことも理解すべきです。

■佐原隆幸教授「途上国の課題解決の切り札を探せ」 学術博士

途上国の直面する問題を解決するための具体的な方法を見出します。具体的には、

- (1) 事例を使って、プロジェクトの作り方、それを成功させる方法を学習します。
- (2) 安全な水、初等教育、母と子の健康、ゴミ問題、森林環境問題、農村開発、都市貧困、観光開発、フェアトレード、人間の安全保障など途上国が抱える重要な課題を取り上げます。 (3) 援助機関、NGO 等の関係者と対等に議論できる論理的な説明能力とプレゼンテーション能力を身に付けます。初めに、関係者が参加して問題を議論するワークショップの進め方、それを通じてプロジェクトを作る代表的手法 (PCM 手法) を学びます。皆さんの身近な問題の解決に応用し、納得して使いこなせるよう指導します。

■椎野幸平准教授「アジア経済・貿易論」

修士(国際経済学)

東南アジアとインド・南アジアを中心とするアジア経済を対象に、理解を深め、 自らも分析する能力を身につけること、アジア経済の分析を通じて貿易や直接投 資、通商政策など国際経済学の基礎的な知見を身に付けることを目的とします。 アジア経済の分析を行う上で必要な基礎的な知識、統計の見方・扱い方、さらに はプレゼンテーションの方法などについて学ぶと共に、アジアの中で関心のある 国や分野について一定の理解と分析ができようになることを目指します。

■下條正男教授「東アジアの歴史と文化を考えます」 文学修士

近年の東アジア世界には、過去の歴史に対する認識の違いから、相互不信に発展する傾向があります。それは過去の歴史をどのように理解するかによって、態度が分かれ、対立していくからです。ですがその前に、客観的事実はどうであったのか。「侵略」とみられがちな日本による朝鮮統治や台湾統治、満州開発を多角的に検討し、「開発とは何か」を考えます。あわせて明治維新以後の日本が、急激な近代化(西洋化)に耐えられた理由を明らかにし、拓殖大学にちなむ「拓殖学」の系譜を明らかにします。

■竹下幸治郎准教授「身近なラテンアメリカ」

学士 (外国研究)

多くの日本人にとり、ラテンアメリカは「辺境」なのではないでしょうか。鉄、 銅、大豆など、生活の根幹を支える資源を同地域より輸入しているのは教科書で 習っていても、それを普段の生活で意識することは少ないでしょう。

しかし近年、スーパーに並んでいる品物のラベルに、ラテンアメリカの国々の名前を見かけることが増えてきました。チリ産のサーモンやワイン、メキシコのアボカド、ブラジルの鶏肉、コロンビアコーヒー、エクアドルバナナなどが良い例です。また、ポルトガル語のロゴが入っている「ATHELTA(アスレタ)」のウェアはサッカー少年の間ではすっかりお馴染みとなりました。サービス分野に目を転じると、本場のブラジリアンバーベキューのレストランチェーン「バルバッコア」は店舗を増やしていますし、職業体験型テーマパークでメキシコ発祥の「キッザニア」は幼児を持つ家族に大人気です。東海地方に行くと、南米から日本に働きに来たり、定住したりしている南米出身の方々も多くみかけます。

実は身近なラテンアメリカ。拓殖大学では、こうしたラテンアメリカ地域の政治

経済、ビジネス、そしてその背景にある歴史・文化について学ぶこともできます。

■竹下正哲教授『「知っている」ではなく、「できる」を求めて』 博士(農学)

学生と教員が一緒のチームを作り、まだ世界の誰も解決できていない問題を探し、それにチャレンジしていきます。そのとき、頭脳だけでは足りません。たとえば自転車に乗れるようになるためには、どうしたらよいでしょうか?専門書を百冊読めば、乗れるようになりますか?自転車に関する Youtube を百時間見れば、乗れるようになるでしょうか。無理でしょう。教室での勉強は、それと似ています。自転車に乗れるようになるためには、体を使うしかありません。国際協力も同じだと考えています。

■武田晋一准教授「アジアの空港計画の理解」

工学修士

「実証」を伴った「システム分析」をテーマにしています。「他大学との合同交通調査によるデータ取得」「Excel・R による分析」「レポートの作成」「プレゼンテーション資料の作成」「発表・質疑応答」の4つを大きなテーマにしています。また英文の資料・報告書を読み込むことで単語力や表現力をつけてもらいます。最後に PowerPoint を使った発表と質疑応答を数回繰り返します。発表・質問の仕方を含めて練習します。海外も含めた他大学 0B との交流にも力をいれてきます。

■杜 進教授「中国と世界」

急速な経済成長に伴い、中国がますます世界の注目を集めるようになっています。 中国の成長と発展が世界に大きな機会を提供する一方、格差問題、社会的不安定、 民族問題環境問題等々の国内問題は、中国の対外関係にも影響を及ぼしています、 大国化する中国が抱る「内憂」と「外患」を客観的かつ総合的に学習します。中華人民共和国建国以来 60 年の歴史を政治、社会、経済、文化、外交の側面から総合的に学習し、さまざまな中国問題を提起し、本格的な中国研究への関心を呼び起こしていきます。

■戸川 点教授「日本の歴史と文化、教育について考える」 文学修士

教職志望者を中心に日本史や日本文化史、現代の教育、社会でおこるさまざまな問題について深く学び、教員または社会人としての力量を高めていきます。教員志望の人には参加してほしいと思っています。教員志望者でなくとも歴史や文化、教育、社会問題などに関心があればどなたでも参加 OK です。歴史学は資料を分析し、客観的な事実に基づき、論理的に歴史像を構築する学問です。こうした歴史学の方法や絵画史料(絵巻物等)や仏像など美術作品の見方等を学び、現実の様々な問題について考えます。

■徳永達己教授「地方創生の経験を通じて国際開発について考える」 博士(工学)

現在開発途上国は、水・エネルギー、交通、電気、情報通信といったインフラストラクチャー(社会基盤)の需要が極めて高くなっています。我が国も成長戦略の一環として高速鉄道や発電所などのインフラビジネスをグローバルに展開しており、国際開発において最も重要、かつ注目を浴びている分野の一つです。私の研究室では、特に住民参加型のインフラ整備手法に着目し、事業の効率化について研究を行うとともに、アフリカなどの途上国で実践されているこれら手法の国内の地方創生(まちづくり)への適用方策について検証を行っております。

■徳原 悟教授「世界経済の動きを知る」

博士 (国際開発)

わたしたちの生活に世界経済の動きが大きな影響を及ぼしていることを知ることが目的です。モノ、お金、ヒト、情報が速いスピードで世界を動き回っています。この流れの中で、わたしたちは生活しています。この流れが変わるとわたしたちの日々の生活も変化してきます。このことを理解することによって得られた知識を自分の将来選択に活かしてもらいたいのです。また、最近では企業においてもお金や会計などの知識が求められています。そんなこともあり、経営分野の話題も取り上げています。

■内藤嘉昭教授「観光で思考する私自身と社会」

博士 (学術)

皆さん、旅行は好きですか?それは未知との出会いで不安もある反面とても楽しい学びの場です。「大学に行けなかった私には - 旅こそが唯一の教師だった」。 高卒で東大教授になった建築家の安藤忠雄の言です。観光を題材に論理的思考力を養うことで、そこから未知なる社会と自身への理解を深めることになれば、と考えています。観光はあくまで一つの素材にすぎず、着眼点、解決力、論理力、表現力を体得し、実社会でそれを還元する。これこそ学問によるベストな自己鍛錬と考えます。

■西口茂樹教授

体育学修士

レスリング競技を専門として、コーチ学 (運動方法) を研究してきました。主に、減量や戦略・戦術の分析等をおこない様々な大会において実践し成果を収めてきました。今後は、スポーツの世界において、よく使われている『心技体』ということばの中で『心』という一番見えにくく、また強化の難しいところに着目し、

本人のパフォーマンス能力を最大限に引き出し導けるように、コーチ学の立場から、研究していきたいと思います。

☆日本レスリング協会強化本部長☆日本オリンピック委員会ナショナル・コーチ

■野村 進教授「どう生きていくか?」

自分の可能性を見つけよう!そして、引きだそう。このゼミでしか行けない旅行。 比較文化の視点は絶対に役に立つ。だから身に付けよう。「比較文化」の視点さ えあれば、何を発表しても自由です。たとえば、「スタジオジブリとピクサー」 「世界の野球、日本の野球」「日本製のアニメの世界への広がり」「ヒッチハイ ク旅行体験」などなど。

☆野村教授はノンフィクション作家としての顔もお持ちです。

『コリアン世界の旅』(講談社:1996 年、大宅賞・講談社ノンフィクション賞)、 『アジア 新しい物語』(文藝春秋:1999 年、アジア太平洋賞)、『どこにでも 神様 知られざる出雲世界をあるく』(新潮社:2018 年、大元石見神楽研究賞)

■原嶋洋平教授「地球環境問題への社会の取り組み」

博士 (学術)

地球温暖化や生物多様性減少などの地球環境問題は、国際社会における最も重要な問題です。その原因は私たちの日々の暮らしや仕事に深く根ざしています。最近では、社会の各分野で地球環境問題への取り組みが活発です。企業、消費者、非政府組織(NGO)、政府、地方公共団体、国際組織、研究者などが実際にどのような地環境問題への取り組みを行っているか学びます。そのために、まず、地球環境問題に関する入門書を読み、基礎知識を修得します。次に、各自が具体的な取組事例を調査し、まとめます。

■福田惠子教授「異文化交流を通して日本と向き合う」

修士 (言語学)

世界を知る前に日本を知る必要があると考えます。異文化交流によって、自文化を明らかにし、複眼的思考を目指します。日本人の学生の皆さんは、他文化と比較することによって、日本文化を捉え、留学生の皆さんは、自文化と比較することによって、日本文化を捉えてみましょう。日本に関する知識を書籍や見学を通じて蓄積し、さらに異文化交流によって自文化を捉えましょう。関心のあるテーマを見つけ、様々な活動(インタビューやアンケートなど)を積極的に取り入れ、情報収集しましょう。

■水野晶子教授「日本人ならではの英語学習法をまとめあげる」 文学修士・教育学修士

日本人の自分だからこそ、学習者に伝えられる、苦労して身につけた英語の学習 法を、特に音声及びライティングの側面を中心に、理論的、実践的にまとめあげ ることを最終の目標としています。日々の授業の中では、日本語と英語の違いに 注目し、その違いをうまく指導に活かすよう心がけています。たとえば、音声面では、学生たちに英語のアクセントや日本語と英語のリズムの違い等を理解してもらった上で、実際に練習を重ねていますし、ライティングの面では、日本語と 英語の思考パターンの違いを反映したレトリックの違いを理解してもらった上で、実際に書く練習に入ります。このように、理論として学ぶと同時に、実践を通して、学生たちに体得させていくことを目指して、毎日の授業にはりきって臨んでおります。

■M. ミルティアドス特任講師

修士(教育学)

My research focuses on exploring how to introduce everyday learning

skills into the classroom; Critical Thinking Skills. In a discussion class on any topic, students are required to come up with several options and evaluate their relative values to make the right decisions and explore the topic in a more meaningful manner. Therefore, interacting with every classmate is an important factor in class; interpersonal skills are developed in my classes. An important component of interaction with others is the ability to communicate and develop rapport. Communication is not just about speaking. It involves active listening; understanding body language and negotiating to find the best solution.

■文 大宇教授「韓国・東アジア地域研究」

学術博士

日本と韓国は地理的に近いだけでなく、言語、文化、経済、社会の面でもっとも近い国です。この近さは近年の日本での韓流ブームの要因のひとつでしょう。しかし近さばかりではありません。韓国について一歩踏み込んだ知識を得た上で、韓国と日本との関係、および世界との関係について多面的に考察することが大切です。また、韓国への語学研修、現地旅行などを通じて皆さんの韓国への理解をサポートします。導入として、韓国に関する基礎的な知識を幅広く学びます。

■茂木 創准教授「世界を知る。自分を知る。」

修士(経済学)

国際経済を勉強します。国際経済を理解する上で重要となる考え方に「比較優位」というものがあります。誤解を恐れずにいえば、「自分の得意なもので勝負しよう!」という考え方です。「得意」な分野を出し合って、よりよい世を作っていこうというのが比較優位の重要なメッセージです。「強み」を伸ばす一方で、

様々な価値観と共生していかなければなりません。相手を「思いやる」気持ちが なければグローバリゼーションのダイナミズムを理解することはできません。

■矢口 優教授「経済学を使って農村開発・国際協力・地方創生を学び、 体験してみよう」

博士 (経済学)

矢口ゼミでは新しい経済学の考え方を応用して、たとえばアジア各国の経済や開発問題について考えたり、恋愛、対人関係といった自身の悩みを解決する方法を考えたり、経済学以外の人間行動を含めて経済学を多面的に勉強していきます。 実際のゼミ活動では、座学や発表・討論だけでなく、実践・体験を重視します。 その一環として、国内外でのフィールド学習を重視し、これまで日本国内では山梨での地方創生活動や多摩市でのボランティア活動を、ゼミ合宿では国内は箱根、北海道へ、海外ではタイ、キルギス、マレーシア、インド、インドネシア、オーストラリアでのゼミ合宿・フィールド学習を実践してきました。

■横山真規雄教授「世界を見る、日本を見る、そして人間を見る」 法学修士

将来的にも様々な書籍や論文を読み通して、その内容を理解し、更には解釈批評し、知識として定着できる「読書力」を身に着けるため、まず、公務員・行政書士・宅建試験にも役立つテキストを使った「基礎法律学カリキュラム」に従い学習します。それと共に、現代社会が抱える様々な問題の中から、各自が興味のあるテーマを選び出し、学術的研究を進めていきます。選ぶテーマも研究対象とする国や地域も、皆さんの希望を尊重し自由に選択できます。「基礎法律学カリキュラム」を通して養った文書読解力を駆使し、選んだテーマについての文献や資料を一つ一つ丁寧に読み込み、教員やゼミ仲間と一緒に考え議論しながら、段階的に研究を進め、論文を作成します。論文作成の過程では、歴史、文化、地理、

社会、経済、政治、法律、心理と幅広く学習し、学問視野を広げ、教養を深めるようにします。ゼミの学習を通して、皆さんには教養・知識を習得するだけでなく、「学ぶ楽しさ」、「学ぶ喜び」も実感していただきたいと考えています。

■吉野文雄教授「経済学をきわめる」

博士 (経済学)

国際経済を理解するために経済学を学ぶ。

- ①「暗記第一」。研究の第1歩は暗記。重要な経済用語などは、その意味がすら すらと言えるようになってから分析にすすみましょう。
- ②「体験より思索」。ものすごい速さでお札を数えられる人もいるかもしれません。このゼミではそんな実力よりも、おカネとは何か定義できることを重視。
- ③「読むより書く」。書物やデータを読むよりも、文書を書きデータをまとめる ところから勉強を始めます。「読む」は手段、「書く」が目的。

■リチャード ヘセルトン准教授「英語」

修士 (英語教育法)

My reasearch field is Teaching English to Speakers of Other Languages (TESOL) and my research interests include Second Language Acquisition (SLA) communicative teaching methodology and teacher and learner motivation. My English classes focuses on oral productive skills. The goals of my classes are to help students to become more comfortable speaking English for various communicative purposes. Through interactive group work, pair work and presentations, students have many opportunities to improve their English communication skills, conversation strategies and general fluency in English. Students also have many opportunities to improve creative and critical thinking skills through sharing their opinions on

various topics with their peers.

「ネパール・農業を通じた農村地域活性化プロジェクト 覚書締結式」 2 0 1 7 . 9 . 1 5



山本美香 JICA 事務局長(右)と佐原隆幸国際学部長(当時)



締結式後、八王子国際キャンパス国際学部農園にて

写真で見る実践学修の現場

「ソウル市中学訪問-英語授業参観」



(新井典子教授:8頁)

「フィリピンセブ島ゼミ合宿」



(新田目夏実教授:9頁)

「石川ゼミ春合宿~持続可能なまちづくりのモデルケース 徳島県神山町でのフィールドワーク」



(石川一喜准教授:9頁)

「粉もの食文化の探求活動(大阪市アメリカ村付近)」



(稲田雅也教授:9頁)

「2018.9ゼミ台湾合宿:台北市内にて」



(王曙光教授:10頁)

「八王子国際交流フェスティバル 2018」



(岡田 実教授:11頁)

「ベトナム短期研修

日越大学古田元夫学長表敬訪問 2018」



(小高 泰特任教授:11頁) 「タイ研修。バンコクの王宮で」



(甲斐信好教授:11頁)

「海外ゼミ合宿:イタリアのベニスにて」



(佐藤明彦教授:13頁)

「文献読み込み中」



(佐藤伸一郎教授:13頁)

「PCM手法でプロジェクト進捗管理の改善策

をつくる(インドネシア行政官研修)」



(佐原隆幸教授:14頁)

「2年生~4年生合同ゼミ」



(椎野幸平准教授:14頁)

「ネパールの農家にて」



(竹下正哲教授:16頁)

「コンケン大学・日本大学・拓殖大学合同交通調査(タイ)」



(武田晋一准教授:16頁)

「ダイヤモンド富士の企画に集まった 地域住民と学生」



(徳永達己教授:17頁)

「ゼミ生とのサントリー山崎蒸留所見学」



(徳原 悟教授:18頁)

「ワット・プラタート・ドイステープ(タイ、チェンマイ」



(内藤嘉昭教授:18頁)

「環境問題が引き起こす社会の変化を見極めよう」



(原嶋洋平教授:19頁)

「手ごね寿司体験:お店の方と店頭にてゼミ伊勢合宿 2018.9.5」



(福田惠子教授:20頁)

「/r/と/l/の発音指導」



(水野晶子教授:20頁)

「韓国研修(現地学生と交流会)」



(文 大字教授:21頁)

「ゼミ研修:凍結したウランバートル・トール川の上で」



(茂木 創教授:21頁)

「中央アジア・キルギスにて、地域振興活動で行われている 羊毛フェルト加工の体験をするゼミ生」



(矢口 優教授:22頁)

「マレーシア、コタキナバルにて、モスクを見学」



(吉野文雄教授:23頁)

〈拓殖大学地域連携センター会議委員〉

学 長	川名明夫
副学長	山田政通
国際学部教授	佐原隆幸
商学部准教授	松橋崇史
政経学部教授	山本尚史
外国語学部教授	関口美幸
外国語学部教授	藤本淳史
工学部准教授	工藤芳彰
工学部准教授	永見 豊
国際学部教授	竹下正哲
国際学部教授	徳永達己
八王子事務部長	鵜木則夫(事務統括)
八王子総務課長	上條聡視(事務担当)
八王子学務課長	加藤秀紀(教学関係担当)
八王子学生支援室長	橋本知子(学生関係担当)
八王子国際課長	佐伯孝夫(留学生関係担当)
八王子事務部審議役	荒川正彦
	副 国際 兴 教授 教授 教授 教授 教教授 教教授 教教授 教教授 教教授 教教 教教授 对国 国 不 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八

以上

◆事務局:八王子事務部

※地域連携センター会議は、同センターが実施する事業の内容・方策等 について審議・調整する。

尚、上記委員は令和元年度委員である。

=編 集 後 記 =

ご覧いただき、ありがとうございました。今回は、本学国際学部の教員をご紹介させていただきましたが、如何でしたでしょうか。緑豊かな本学の八王子国際キャンパスには、その他に外国語学部と工学部があり、アジアを基点に世界各地との交流を深めています。「社会に開かれた国際大学」を目指す本学としては、今後さらに私たちの強みである国際協力と共に、外国語教育の分野や最先端の工学研究でも地域社会に貢献していくつもりです。どうぞよろしくお願いいたします。(尚、作成にあたり前国際学部長佐原隆幸教授、岡本慎一郎八王子電算課長にご協力頂きましたことを付記させて頂きます。) 副学長(地域連携センター副センター長)山田政通(言語学博士)

郷

八王子国際キャンパス 〒193-0985東京都八王子市館町815-1 (042)665-1443



発 行: 令和元年5月31日 発行者: 拓殖大学地域連携センター